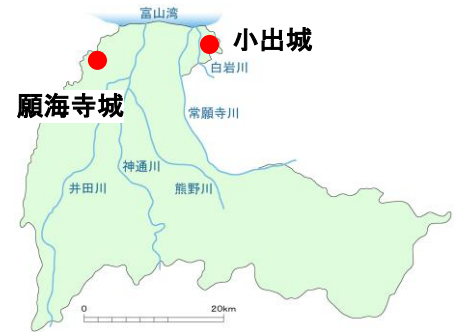


# 戦国の城を掘る～小出城と願海寺城～

戦国時代末の天正年間中期（1580年代頃）は、天下統一を目指す織田信長勢と越後の上杉勢との戦いが、越中において最も激しくなった時期です。富山市内で両軍の攻防戦の舞台となった城のうち、小出城と願海寺城について紹介します。



## 1 小出城跡

### (1) 城の立地と歴史

小出城跡は、白岩川の支流である小出川右岸の低湿地に立地します。比較的海岸に近いこの一帯は、白岩川と小出川の水運の要衝に位置し、古くから栄えたとみられます。

天正 9～11（1581～1583）年、勢力境界線にあった小出城をめぐる、織田勢（佐々成政）と上杉勢（上杉景勝）の間で激しい攻防戦が繰り返されました。天正 9 年には織田勢の最前線基地となっており、『信長公記』に記された「小出城の戦い」では、成政が信長主権の御馬揃のため上洛した隙をつき、上杉勢が小出城を包囲して攻撃しました。その知らせを聞いた成政が京都から越中に引き返したため、上杉勢は撤退しました。その後、天正 10 年に起きた本能寺の変により、上杉勢は小出城を手中に収めますが、天正 11 年には成政が越中を平定し、小出城はその役目を終えました。

### (2) 発掘調査からみる城の姿

発掘調査では堀の一部を確認しました（写真 1）。堀は、幅 13 m 以上、深さ 1～2m に及びます。堀には分岐している箇所があり、埋め立てや掘り直しがなされていることから、小出城には複数の曲輪があり、曲輪の配置は時期により変更されたと考えられます。

堀の中からは鉄砲の玉（鉛玉、土製弾丸）や長刀の柄、腰刀といった武器や軍馬とも考えられる大型の馬の骨や歯（写真 2）、戦火を想起させる被熱した遺物等が出土しており、文献にみえる攻防戦を裏付ける資料となっています。

また、井戸が 14 基以上確認されており、井戸を埋め戻す際には漆器や箸などを用いた祭祀が行われていました。

### (3) 出土した暮らしの道具

城跡からは戦に関わる資料以外にも様々な暮らしの道具が出土しています。中世土師器や陶磁器等の食器、多量の木製品（写真 3、漆器・箸・機織り機の部材・櫛・下駄（子供・大人用）・たも網の枠等）、農具の鋤先、基石等があり、糸を紡いで機を織る女性や小さな下駄をはいた子供、たも網でとった川魚料理がならぶ食卓といった、平時の城における生活の一幕が思い浮かびます。

漆器は 70 点を超え、鶴亀などの縁起の良い文様が描かれていま



写真 1 堀の発掘状況



写真 2 馬の骨・歯、鉄砲の玉



写真 3 様々な木製品

す。漆うるしを入れたとみられる曲物まげものや漆を塗る道具とみられるへら状木製品もあり、城内に職人を招き入れて漆器を製作したと推測されます。

## 2 願海寺城跡

### (1) 城の立地と歴史

願海寺城跡は、射水平野中央に位置します。城は天然の要害ようがいとなる低湿地ていしつちに立地し、東に流れる鍛冶川かじは水運の便を提供する天然の水堀ほくりくどうとなっています。旧北陸道は、願海寺付近で屈曲を繰り返しており、敵の急進撃を阻む「願海寺の七曲り」として知られています。

願海寺城は、16世紀半ば頃に築かれ、越中国人こくじんの寺崎民部左衛門盛永てらさきみんぶ ざえもんもりながとその子喜六郎きろくろうが城主として居城きよじょうしました。寺崎氏は元龜3(1572)年には上杉方に属しましたが、天正6(1578)年の上杉謙信の死去に伴い一時織田方に走りました。しかし、佐々成政の越中分封に対する不満から、先述した天正9年の「小出城の戦い」をきっかけに再び上杉方に寝返ったため、織田勢すがやながより(菅屋長頼)に攻められて落城らくじょうしました。

### (2) 発掘調査からみる城・城下町の姿と出土品

願海寺城は、『田中尚賢等連署状』の記載から「實城」(本丸)と「二之廻輪」(二の丸)の2郭以上の曲輪まがわからなる複郭式ふくかくの城であったと考えられます。本丸の位置は、城館じょうかんにちなむ「館本」の小字が残る加茂社稻荷神社周辺と伝えられ、神社北東ではそれを裏付ける大規模な堀(幅約9~13m、深さ2m以上)が見つかりました。その80~120m東には幅約7~17mの複数の堀(写真4)が確認され、曲輪内には井戸や礎石建物等がありました。出土品には、中世土師器や陶磁器、木製品(写真5、漆器・箸・槽状木製品・建築部材等)、塼(焼レンガ)、石臼等のほか、金や銅が付着した取瓶(とがした金属をすくう容器)があり、城内で銅や鉄の铸造ちゆうぞうや金の加工を行っていたと考えられます。戦火で被熱した礫れきもありました。

家臣の屋敷とみられる居館きょかんの堀(幅3~4m)等も確認され、中から火災に伴って廃棄された多量の遺物が出土しました。この火災は、天正9年頃の落城記録と一致すると推測されています。出土品には木簡もつかんや将棋の駒しょうぎ こまの「歩兵」等がありました(写真6)。

城下町エリアは、城の周囲の東西約1km、南北約600mの範囲と推定されています。発掘調査では、屋敷地を区画した溝が確認され、当時使われた多くの食器類や様々な道具が出土しました。



写真4 城を防御した堀



写真5 様々な木製品

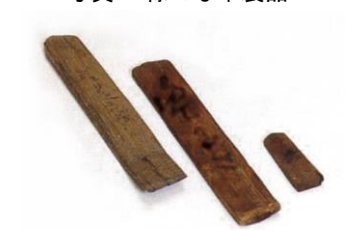


写真6 木簡、将棋の駒

### 一おわりに一

小出城と願海寺城は、天下統一に向けて刻々と情勢が移り行く戦乱の世に営まれました。両城とも改修を繰り返しながら使用されており、水運となる河川や天然の要害ようがいとなる湿地帯の存在が、軍事拠点の立地環境として適していたと考えられます。文献史料で知られていた両城の存在は、近年の発掘調査により考古学的に実証され、次第にその姿が明らかになりつつあります。今後のさらなる研究の進展による全容の解明が待たれます。